駒澤地理 No.33 pp.101～116, 1997
Komazawa Geography

文学地理学のゆくえ
――杉浦芳夫編『文学　人　地域』はなぜ面白くないか――

小　田　匡　保

Ⅰ．はじめに

近年，文学作品を扱った地理学の論著がいくつか見られるようになった。本稿がとりあげる『文学　人　地域－越境する地理学』[1]もまたそのひとつである。本書は，1992年に『文学のなかの地理空間』[2]を著して学界の話題をよんだ[3]編者杉浦芳夫が，文学に関心をもつ地理学研究者を若手中心に集めて，また１冊の本を編んだものである。中身は，編者を含め10人の執筆者が８つの章を分担して書いた論文集の形になっており，これらの論文を通観することによって，我が国における近年の「文学地理学」[4]の動向をある程度把握することができる。本書に対しては書評も既にいくつか出ている[5]が，本稿では評者なりの観点から，あらためて個々の論文ならびに本書全体の内容を吟味し，さらに我が国の文学地理学の動向について，評者の見解を述べることにしたい。

本書の構成は次のとおりである。

はしがき（杉浦芳夫）

Ⅰ　古代日本における「風景」の誕生（阿部　一）

Ⅱ　「場」をめぐる想像力―古代説話にみる「国」の景観（内田忠賢）

Ⅲ　武蔵野の独歩（山田雄秀・中村和郎）

Ⅳ　小説『土』の歴史地誌学（杉浦芳夫）

Ⅴ　推理小説の舞台としての場所―金田一耕助が活躍する作品世界（内田順文）

Ⅵ　『氷壁』の自然誌（岩田修二）

Ⅶ　シングル・セルのふるさと―増田みず子の作品世界（福田珠己）

Ⅷ　児童文学に描かれた架空空間と子どもの探検行動―『赤毛のアン』及び『ムーミン』を事例に（寺本　潔・井藤かおり）

とりあげられている文学作品は，Ⅰ章が『万葉集』をはじめとする古代の和歌・物語，Ⅱ章が『風土記』（８世紀），Ⅲ章が国木田独歩のエッセイ『武蔵野』（明治31年），Ⅳ章が長塚　節の小説『土』（明治43年），Ⅴ章が金田一耕助の登場する横溝正史の一連の推理小説（昭和21年～55年），Ⅵ章が井上　靖の山岳小説『氷壁』（昭和31年～32年），Ⅶ章が増田みず子の一連の小説（昭和59年～平成２年），Ⅷ章が児童文学であるモンゴメリの『赤毛のアン』（1908年）とヤンソンの『ムーミン』（1950年頃か？）である。文学作品のジャンルも時代もバラエティに

富んでおり，また外国文学もまじっている。本書全体としては，古代2・明治2・昭和戦後3・外国1というように，とりあげる文学作品の時代順に並べた章配列になっている。

Ⅱ.『文学　人　地域』の内容

では，まず本書『文学　人　地域』の個々の論文について，論旨の紹介をしていくことにしたい。それぞれの内容に関するコメントは，扱われている文学作品を評者が読んでいないこと，あまりに煩瑣になることなどから，最小限にとどめたい。

「はしがき」で，編者の杉浦は，第二次世界大戦後の人文地理学が，隣接学問分野から「輸入超過」（3頁）といえるほど知識を摂取してきたなかで，文学がほとんど一顧だにされなかったことを指摘する。そして，テクスト論をはじめとする文学（批評）理論と地理学方法論との関係について示唆する。しかしながら，本書の内容は，そのような高邁な理論・説とは無縁に，文学作品を「地理学（関連分野）の立場から……自由に読み解き，解釈」（4～5頁）しようとするものであると述べる。本書を通読すればわかるが，各章ともそれぞれの執筆者が，文字どおり「自由に」論を展開している。杉浦の所論に対するコメントは，本書全体のこととも関わるので，関係箇所でその都度述べることにしたい。

第Ⅰ章で，阿部は「風景」を問題にする。括弧つきの「風景」とは，「「見かた」としての風景」（12頁）である。その「見かた」とは，環境を知覚し，表現を生み出すものであり（したがって，「見かた」は環境・表現とともに三角構造をなす），評者の理解では，「見かた」とは認識ということであろうか。言い換えれば，著者の言う「風景」とは，「われらの認識の枠組みそのもの」（10～11頁）であり，「一定の集団に共有された観念的・主観的なイメージ」（10頁）であるという。このような「風景」は，「文字によって一定の集団に共有されるようになったイメージ」（12頁）であるとして，阿部は「風景」の誕生が，文字で表記された文学の誕生と一致すると考え，古代日本における「風景」の誕生を，文学との関わりにおいて検討しようとする。結論としては，「風景」以前に，弥生時代から古墳時代まで，近畿地方を中心に「シマ」のイメージを基本とする宇宙観（コスモロジー）があったこと，そこでは，「見かた」＝「シマ」のイメージ，表現＝「うた」，環境＝神の場所，という安定した三角構造を形成していたこと，7世紀末から8世紀にかけて，宮廷人に共有されたイメージとしての「風景」，それも「色の美しいやわらかな風景」が生まれ定型化したこと，そこでは，「見かた」＝「風景」，表現＝和歌・絵画・庭園・洲浜・物語，環境＝名所，という安定した三角構造が再び見られること，が述べられる。阿部論文は，はじめて著者の文章を読む人間には難解である（本書を一般の人々に対する地理学の啓蒙書あるいは商品として考えるならば，この論文配列は感心しない）。しかし，著者の別の著書で示されている彼の基本的立場[6]を知れば，（論旨の重複が多いこともあって）本論の理解は容易になる。中身についてであるが，著者の壮大な構想には敬意

を表しつつも，個々の事実認識や解釈には賛同しかねるものがある（たとえば，「シマ」のイメージのコスモロジーは本当にあったのだろうか)。また，別著で示唆されるように[7]，「風景」というわかりにくい用語が，トゥアンの主張（コスモロジーからランドスケープへの変化）を日本に適用したにすぎないのであれば，著者にはトゥアンの「見かた」にとらわれることなく，文学なり資料を見ることを希望する。

第Ⅱ章では内田忠賢が，『風土記』を主な史料として，古代日本の「場」をめぐる「想像力」を検討する。著者の関心の出発点は，現代の「私たちとは異なる思考」(48頁）つまり「想像力」を探ることであり，それを『風土記』の中で検討しようというのである。具体的には，「「国」と呼ばれる在地の生活空間」(53頁）を対象とし，「多様な意味を持つ個々の空間構成要素」(54頁）すなわち「場」を解読する。換言すれば，「「国」という空間の成立にどのような構成要素，ランドマークが必要であり，それは如何なる場であったかを記述」(75頁）する。結論として，国見が行なわれる山が，支配には不可欠であり，「国」を構成する場として極めて重要であること，樹・井が「国」にとって始源の場であること，酒殿・酒田が樹・井に次ぐ中心性を持ち，「国」の生命力を安定させていること，これらの周囲に，開発され，あるいは保護される場としての野が広がること，そして，「国」の周縁には山口・坂という場が位置すること，が述べられる。内田忠賢論文は，著者も認めるように，死者たちの「生活世界」を記述するための基礎的作業の段階であり（したがって，一般読者受けする内容ではない)，本論文の結果が今後どういかされるのか，景観復原とどうつながっていくのか，あるいは著者は触れていないが，「村」のような「国」以外の生活空間とどう関わるのか，その展望を知りたいものである。

第Ⅲ章では，山田・中村が国木田独歩の『武蔵野』をとりあげる。著者は，「なぜ独歩が武蔵野を描く対象としたか」(84頁）という問いかけからスタートする。独歩は，武蔵野の美しさや詩趣を見て感動したのではなく，ツルゲーネフの『あひゞき』の文章を読んで，独歩の中にまず詩趣（評者なりに言い換えれば，あるものに詩趣を感じる感覚）が形成され，それにかなったところが，たまたま武蔵野であったという。さらに，その「詩趣」の特質として，①田舎の人にも都会の人にも感興を起こすような情感，②生活と自然とが一体になるような情感，を指摘する。一方，独歩が武蔵野という場所を実際に「視て」いることから，客観的な武蔵野と『武蔵野』の描写を比較する。その結果，土地の起伏や土地利用の面で，『武蔵野』の記述がほぼ精確であることが確認される。また，上述の二つの「詩趣」が，客観的に「視た」武蔵野（①独歩の住んでいた渋谷村が東京市の町外れに位置すること，②農家が畑や林と入り交じって散在すること）と合致することが述べられる。最後に，同じ独歩の『忘れえぬ人々』から，独歩の場所をとらえる（「みる」）姿勢をみようとする。著者によれば，独歩は普遍的な「自然」を指向し，風景の描写によってリアルなものをおおい隠したのだという。また，現実的なものを捨象しようとする超越的な立場に立っていたのだという。ツルゲーネフの『あひゞき』の文

章が『武蔵野』に影響を与えているという著者の指摘には興味を覚えるが，ただそのこと自体は『武蔵野』の本文中にも書かれていることで，『武蔵野』に関心を持つ人には周知のことのようである[8]。また，なぜ武蔵野を描いたかと問いながら，「詩趣」を強調するあまり，「たまたま」と説明してしまっては答えにならないだろう。「詩趣」の二つの特質が，客観的に「視た」武蔵野と合致するという後の指摘も生きてこない。「詩趣」の特質や独歩の場所を「みる」姿勢をめぐる著者の解釈にも，評者のついていけないところがあるが，評者は独歩の作品を読んでいないので詳述は避けたい。

第Ⅳ章では，本書の編者杉浦により，長塚　節の『土』がとりあげられる。『土』は，茨城県国生集落の，ある小作農家の生活を通して，明治末の農村状況を描いた小説であり，著者は，ここで「農業を営む人々の姿を，……『土』をテクストとして地誌学的に考察すること」が目的であると記す。タイトルに「歴史地誌学」とあるゆえんである。しかしながら，杉浦論文の内容は，「地誌」というタイトルとは裏腹に多岐にわたる。まずはオーソドックスに国生付近の景観（土地利用・土地区画）（著者流に表現すれば地主長塚　節のみた風景）が，『土』の描写と地形図の記載をもとに述べられる。次に，小作地率の増加，地主の林野集積，小作の困窮化，地主の役割などに言及される。また，著者は，「『土』のコスモロジー」と題して，農民の嫉妬心や土俗信仰のようなメンタリティに触れ，主人公一家が蛇に憑依されているように描かれていることをも指摘する（このあたりは，文学批評への著者の関心の現われであろうか）。他方，長塚　節について，彼が地主としての立場から『土』を書いていること，それが国粋主義者正岡子規の考え方を受け継いでいることを述べる。論は再び村の話題に戻り，外米や朝鮮牛の輸入にみられる資本主義経済の波及が説明される。最後に，地図・町村是などの作成のことから，フーコーの「監禁空間」に話が及び，明治末に全国で簇生しようとしていた多くの小監禁空間のひとつ（農村）を描いたものが『土』である，としめくくる。本論文で著者は，前著同様さまざまな関係文献を渉猟し[9]，その博識ぶりを，地理的側面のみならず，歴史・人類学・思想史など広範囲にわたって披露している点には敬意を表する。しかし，その博識があふれすぎて，『土』の「地誌」よりもむしろ茨城県全体の状況や関連事項（たとえば耕地整理，地図作成など）の教科書的説明を，延々と読まされているような気にさせられる。

第Ⅴ章は，内田順文が，金田一耕助の登場する，横溝正史の「本格推理小説の舞台となる場所について考察」（168頁）したものである。著者はまず，本格推理小説においては，トリックとサスペンスの両面から，作品の舞台としての場所が重要であること，次いで，我が国の本格推理小説が，戦後横溝正史によって始まったことを述べる。横溝作品では，他の推理小説にも見られるように，金田一を要として，多くの作品がひとつの共通した仮想世界を作っており，また小説の冒頭に事件の舞台を丹念に書き込んで，読者の頭の中に場所のイメージを作り上げているという。具体的な作品の舞台は，代表作に関してはほとんど地方（岡山県・長野県）であり，それは横溝の生活したことのある場所であることが指摘される。そして，なぜ本格作品

の舞台が住み慣れた東京ではなく地方なのかという問題について，異様な事件の状況・動機が，閉鎖的な「ムラ」社会，隔絶された僻遠の農村でならば可能であり，舞台設定がトリックの一部をなしているのだと解きあかす。「金田一もの」は，昭和30年代，金田一の活躍舞台である前近代的農村がリアリティを失うにつれて，いったん衰亡するが，昭和50年代以降再びブームとなる。著者は，この復活理由について，作品が現実味のある話としてではなく，最初から虚構や仮想世界として，若いテレビ世代に受け入れられたと解釈する。内田順文論文は，地理学や「空間研究」(168頁）の論文としてよりも，ひとつの横溝正史論あるいは推理小説論として面白く読める（本章が地理学の論文ではないと批判している訳ではけっしてない)。細かいことだが，著者が最後に多用する，仮想空間としての「リアリティ」という用語には，引っかかるものを感じる。

第Ⅵ章では，本書の執筆者の中でも少し異色の地形学者岩田が，山岳小説『氷壁』をとりあげる。著者はまず，『氷壁』の最初の舞台が前穂高岳東壁であることから，なぜ穂高岳に険しい岩壁が多いのかという問題を設定し，その解説をする（岩石の違いと氷河の侵食によるという)。次に，『氷壁』中の遭難の原因になった落石がなぜ発生したのかという問題の解説が行なわれる（７月という時期，午後という時間帯，大規模な落石という状況から，凍結・融解による落石ではなく，「いつ，どういう原因で発生するのかはまだよくわかっていない」(211頁）山体の崩落であるという)。三つめに，『氷壁』に上高地が描かれていることから，上高地の自然について，江戸時代以来人が入り，開発・自然破壊が行なわれていること，それが，国立公園として自然保護されるようになったことを述べ，それにもかかわらず現在「役所による大規模な環境・景観破壊が進行しつつある」(218頁）と，行政を批判する（梓川の河床が上昇するのは自然の姿であり，河床の上昇を止めるために砂防工事や河川改修を行なえば，『氷壁』に描かれた梓川の景観は失われてしまうという)。著者は従来から上高地の自然問題にコミットしているようで，その主張はわからないでもないが，本書でそのようなアジテーションを読まされては，いささか面食らってしまう。また前半の二つの「なぜ」は，いかにも地形学者らしい問題設定であるが（評者にはそのような疑問はわき起こらないし，またその理由を調べてみたいとも思わない)，なぜ落石が起こったかと問いかけながら，それが（詳しいメカニズムの説明のある）凍結・融解による落石ではなく，原因不明の大崩落だと解説されても（梅雨の影響が示唆されてはいるが)，読者は説明してもらった気分にはならないだろう。

第Ⅶ章では福田が，現代社会で注目を浴びている「シングル」と「ふるさと」を問題にする。すなわち，増田みず子の文学作品をとりあげ，「そこに描かれたシングルを生きる人間と，彼らにとってのふるさとのあり方について読み解いていく」(231頁)。増田みず子の文学には，「生の最小単位としての自己の姿を見つめ，「私」を探し求める主人公が登場」(232頁）するという。著者は，そこから「私」と「私が生きる場所」を読み取ろうとしているのである[10]。増田みず子の初期の小説（シングル化の作品群）には，外界の影響を拒絶し，閉ざされた空間を

好む主人公が描かれる。そこで主人公がかたくなに守ろうとしている「私の場所」こそは，主人公のホーム（人間存在の根元）[11] であると，著者は指摘する。一方，増田みず子のその後の作品群である家族小説では，主人公が「既成のものとしての家や家族，ふるさとの危うさ」（247頁）を思い知り，自分の帰るべきところを模索するという。そして，それは，結局「血縁地縁による所与のふるさと」（253頁）ではなく，まだ到達してはいないものの，ともかく主人公が自分で「選びとるふるさと」（253頁）なのだと解釈する。最後に著者は，「ふるさと」を所与のものとしてではなく，ホームという状態としてとらえること，個人の視点から見ることの重要性を述べてしめくくっている。欧米の人文主義地理学の研究史をも踏まえた著者の主張は意欲的で，福田論文は場所論に関心を持つ読者をひきつけるだろう。ただ，「ふるさと」，「シングル」，「ホーム」という中心概念の関係が整理されず，わかりにくい印象を与えるのは残念である。「ふるさと」論で一本筋を通すほうが，読者にアピールしたのではなかっただろうか。もっとも，１作家の文学作品に登場する数人の主人公をとりあげて，一般的なことがどこまで言えるか，という疑問はついてまわろうが。

第Ⅷ章では寺本・井藤が，児童文学である『赤毛のアン』と『ムーミン』をとりあげ，「そこに描かれている架空空間と子どものメンタルマップの形成」（264頁）を読み取ろうとする。まず，作品の概要と作者（モンゴメリ，ヤンソン）について述べられ，作者の原風景や自己形成空間が作品に影響を及ぼしていることが指摘される。次に著者は，作品中の架空空間を地図化し[12]，作品中の自然描写について，舞台になった場所（プリンス・エドワード島，フィンランド湾）の実際の自然環境（地形・植生・気候など）を参考に，自然地理学的に説明しようとしている。さらに，主人公たちの「たんけん」行動と知覚空間，遊び場所と遊び行動にも触れ，性別や年齢などの違いに起因して，二人の主人公には，行動範囲や遊び行動などに違いが見られることを言う（たとえば，アンの通常の行動範囲は１km以内だが，ムーミントロールは２～３km以内だという）。最後に，今後の課題として，作品中の空間と現実の空間との詳細な対応などを挙げる。本論文には自然地理学的説明が頻繁に出てくるが，木に竹を接いだようで，話の流れを悪くしている（しかも，中には疑わしい記述がある[13]）。ここは，寺本の年来の研究テーマである子どもの知覚環境を中心にまとめてもらったほうが，ストーリーとしてはすっきりしたものになったろう。ただし，作者の原風景の影響や性別・年齢による違いなどの考察結果は，はっきり言って陳腐で新鮮味を感じるものではない。

Ⅲ.『文学　人　地域』はなぜ面白くないか

以上，Ⅱ章では本書の内容を章ごとに紹介・検討してきた。Ⅲ章では，本書全体に関わることを論じてみたい。

検討の手始めに，編者杉浦の手になる「はしがき」に目を向けてみよう。編者は，本書のね

らいとして，①本書の試みが「文学と地理学との間の架橋」に役立つこと，そこまでいかなくとも，②読者に「理系と文系との両方にまたがる地理学の面白さ」に気づいてほしいこと，の2点を挙げる。ここでは，まず②にある「面白さ」ということにこだわってみたい。

「地理学の面白さ」に気づいてもらうためには，地理学の本である本書が面白いと思ってもらわなければいけない訳であるが，では本書ははたして面白いだろうか。大変失礼な評言で恐縮だが，地理学が文学を扱うという皮相的な面白さを除けば，はっきり言って，評者はこの本が面白いとは思わなかった。もちろん，本書の読み手は評者だけではない。読み手が地理学の人間か，文学研究者か，あるいは一般の文学愛好者かといった読者の立場や関心の方向によっても，評価は変わってくるだろうし，同じ地理学の人間でも，反応はひとつではないだろう。また，章（執筆者）ごとにかなり内容の傾向が違い，それぞれに読後感が異なることは，Ⅱ章で個別に述べたとおりである。しかしながら，本書を全体として見た場合，少なくとも評者個人としては面白いとは思わなかった。ということは，地理学が面白い学問だとは思わなかったということでもある。

では，本書はなぜ面白くなかったのだろうか。その理由を述べる前に，そもそも「面白い」とはどういうことかを明らかにしておく必要がある。本を読んで何かが面白いと思うということは，読者が期待をしているものに対して何か発見があるということである。あるいは，読者が期待していなくても，本を読んでいくなかで著者の関心に引き込まれ，著者の記述に共感したり説明に納得できるということである（そのためには読者にそれなりの予備知識や潜在的関心が必要になるし，著者も読者の共感を呼ぶような書き方をしなければならない）。

まず前者の「面白い」ということを問題にしてみよう。すなわち，本書は，評者の期待に反して発見がなかった，期待はずれだったという点である。評者は，文学研究者や文学愛好者ではないから，本書で取り扱われた個々の文学作品や作家には，とりたてて興味はない。評者が本書に抱いた最大の関心は，一地理学研究者としては，地理学が文学作品をどのように利用することができるかということにある。言い換えれば，地理学が文学作品を使うことによって，何がわかるかということである[14]。その期待に反して，評者は本書から得るところがなかった。もちろん，個々の論文では，ある文学作品なり作品群を分析することによって，何がしかのことを明らかにしている（ように見える）。しかし，そこでは文学作品を使うことが自明のこととしてあり，文学作品を扱う意義についての記述がほとんど見られないのである。たとえば，児童文学の架空空間を分析することによって，現実空間の子どもの行動・知覚を研究するだけではわからない発見が何かあるのだろうか（同じような結果しか出ないのであれば，わざわざ児童文学を利用する意味はないことになる）。このような評者の問題意識に，本書は答えてくれない。地理学が従来利用してきた資料ではわからないことが，文学作品を使うことによって見えてくるのだ，そういう書き方をしてもらわなければ，文学作品の魅力はただの目新しさにすぎず，その本当の意義は地理学研究者には伝わってこない。編者の「はしがき」もそのよう

な総論的記述に乏しく，この点に関するかぎり，評者は本書を面白い本だとは思わない。

次に，後者の「面白い」という点，すなわち，著者の記述に共感できず，また著者の説明に納得がいかなかったという点である。これについては，Ⅱ章で述べたとおり，内田順文論文のように比較的面白く読めたものもある。面白く読めなかったものは，評者の知識や関心のなさ，論述の不明瞭さ・不適切さなどによって，各著者の主張したいことが評者には充分にくみとれなかったからである。皮肉なことに，評者は，本書の中で，杉浦論文・岩田論文のように，明らかに地理学者が書いたとわかる文章ほど面白味を感じない。逆に，内田順文論文・福田論文のように，文芸評論家が書いたと言われても充分通用するような文章に読みごたえがある。その理由を考えるに，後者では，ストーリーの流れがよいということや，著者が文学作品をじっくり読みといているということが挙げられるだろう（したがって，評者もそれに引き込まれることになる)。もちろん，杉浦論文も文学作品の関連箇所を多数引用しており，その点では作品を細かくチェックしているとは言えようが，論点が散漫であるうえに，上述したような多くの参考文献からの引用が，ただでさえまとまりのないストーリーの流れを寸断している。岩田論文，寺本・井藤論文に見られる（山田・中村論文にも少しある）自然環境の地理学的説明も，話の流れを悪くしているという点では同様である。これらの著者は，作品の地理学的注釈づけに関心を持ち（杉浦論文の場合は地理学にとどまらないが)，地理学者の独壇場とばかりに教科書的説明を加えているのかもしれないが，地理的スケールや次元の異なる話がいきなり割り込んでくるために，評者自身は，そのような地理学の話に頭を切り替えることができない。しかも，それらの地理学の話についていっても，説明はそれで行き止まりで（注釈と評者が呼ぶゆえんである)，それらが論文全体の論旨なり作品解釈に重要な意味をもたないのである。結局のところ，評者のなかには，文学作品を主題としてとりあげる以上，（他の参考文献からではなく）文学作品自身から何かがわかるはずだという問題意識が潜在的にあり，そこからはずれる論述の多い文章ほど共感できず，面白く感じなかったということになろう。なお，著者の論理・解釈などに納得できないことから面白さを感じないという面もあるが，それらについてはⅡ章で個別に記したとおりである。

以上，評者が本書を面白く思わなかった理由を述べてきたが，それでは，他の読者は本書をどのように読むだろうか。他人の読後感にまで話を広げるのは，筆が走りすぎているかもしれないが，前述のように，編者が本書のねらいの①として，本書が「文学と地理学との間の架橋」に役立つことを挙げていることからしても，文学の人が本書をどう受けとめるかについて，想像をめぐらさざるにはいられない。すなわち，文学研究者や文学愛好者は，本書を読んで面白いと思うだろうか，ということである。彼らは，個別の作品や作家については，評者などよりずっと関心や思い入れが強いであろうから，それぞれに何らかの発見があるかもしれない。そのことについては評者の想像の及ぶところではない。問題は，文学の人が本書を全体として面白いと思い，したがって地理学という学問を面白いと思ってくれるかどうか，という点にある。

評者の推察するところ，本書は，文学作品に関するユニークな本だ（そういう皮相的な面では面白い）とは認識されても，本当に文学研究者や文学愛好者の心を揺さぶる衝撃的な本にはなりえていないだろう。なぜならば，本書には，作品なり作家に対する従来の解釈や定説を覆した箇所，論点を解決した箇所，不明だった点を明らかにした箇所（これらが言いすぎならば，少なくともそういう書き方をしている箇所）が，ほとんど見あたらないからである。文学研究者や文学愛好者の関心の中心は，文学作品や作家そのものにあるはずで，その作品解釈や作家の評価がこの本で変わらなければ，本書は名実ともに面白いとは思ってくれないだろう。もし仮に評者が文学研究者ならば，地理学的観点から文学作品を読むことによって，従来文学研究者が明らかにしてきたこと以外に何がわかるのか，という期待をする。そのためには，他分野の研究者といえども，それなりに文学の研究史をひととおりおさえて，何が文学研究で問題になっているのかを理解したうえで，ものを言ってほしいと思うだろう。このことは，地理学以外の研究者が，地理学の既存の成果を見ないで，地理学的研究をした時のことを考えれば，すぐわかることである。ただ単に文学作品を「地理学（関連分野）の立場から……自由に読み解き，解釈」（4～5頁）するだけでなく，それなりに文学研究者や文学愛好者にアピールすることを書かなければ，それは地理学研究者の自己満足にすぎず，地理学は変わったことをやる学問だとは思われても，魅力ある学問だとは見てもらえない。かくして，「はしがき」にある②のねらい（読者に地理学の面白さに気づいてほしいということ）は達せられず，また，①のねらい（本書が文学と地理学との間の架橋に役立つということ）も達成されなくなってしまう。本書が純粋の学術書でなく，文学研究者や文学愛好者の目に触れやすい市販の教養書の類でありながら，このような配慮がされなかったのはまことに残念である。

ここで，手前味噌になってしまうが，評者の立場をより明確にする意味で，評者がかつて書いた拙論の経験をもとに，論を付け加えておきたい。評者は，10年ほど前に，西行の『山家集』を使って論文を書いたことがある[15]。これは，山岳聖域大峰の空間的構造を明らかにするひとつの試みで，れっきとした地理学の論文であるが，資料として『山家集』を使ったところに，文学との接点がある。評者は，『山家集』のなかに西行が大峰修行の時に詠んだ歌があることから，そこに登場する地名を現地比定し，西行の入峰ルートを推定した後，各地点で詠まれた歌からそこでの西行の知覚環境と心情を推測し，それを使って大峰を4つの世界に区分した。この拙論は，地理学界では見向きもされないが，国文学の人には何度か引用していただいている[16]。そこで注目を受けている最大のポイントは，結論の大峰の区分ではなく，途中にある西行の入峰ルートの推定である。『山家集』に見える地名や西行の入峰ルートについては，それまでも国文学研究者などの間で議論がなされていたが，曖昧な事柄が多かった。それに対して，評者は地名の現地比定に関する従来の誤りを訂正し，歌の配列順序も考慮することで，西行の入峰ルートをかなりの確実性で推定することができた。こうした国文学の既存の成果に対する反論の部分が，国文学研究者の引用の対象になっているのである。言い換えれば，地理学の論

文である拙論が，国文学の『山家集』研究，西行研究に一石を投じたということにもなるだろう。この評者の経験からも，地理学研究者が文学を扱う際に，文学研究者の研究史を踏まえ，それに（地理学的観点から）何か新しいことを付け加えるのでなければ，文学の人には相手にされないだろうということを繰り返し述べておきたい（もっとも，相手にされなくてもよいと開き直るのならば，話は別であるが）。

Ⅳ．文学地理学の動向

以上Ⅲ章では，『文学　人　地域』全体について批判的に論じてきたが，最後にⅣ章では，本書から文学地理学の動向をどうとらえるか，という問題に取り組んでみたい。

本書には，文学に関心をもつ地理学研究者の論文が集められているが，共通点は文学作品を扱っているという点だけで，方法論的なまとまりは，よくも悪くも存在しない。各著者にはそれぞれの関心の方向があり，また文学作品の利用方法がある。これを，「統一がとれていない」という，この種の論集への書評に見られる常套句で片付けることもできようが[17]，ここでは，「統一がとれていない」がゆえに，それではどのように違うのか，どのような複数の研究方向性が看取できるのか，といった生産的な問題に置き換えて考えてみたい。その理由のひとつは，「はしがき」に，文学地理学の動向を全体としてどう把握するか，という点に関する編者の見解が，ほとんど見られないことにもよる。

評者が本書ならびに関連文献[18]から判断するところ，文学地理学には文学作品の利用目的の点で，次の五つないし六つの方向性があるのではないだろうか[19]。

第一は，ある特定の地域・空間に関する地理的事象を明らかにする資料として文学作品を使うものである。本書中の論文で例示すれば，岩田論文の後半で上高地の変遷を部分的に文学作品に語らせているのがそれに該当する。しかしながら，この方向性は，本書中には例が少ないものの，実は伝統的地理学が文学作品を使う最もオーソドックスなやり方である。たとえば，歴史地理学が過去の景観や行動を復原する（補完）史料として文学作品を使うのがそうであり，上述の拙論における『山家集』の利用もこれに近い。そのような文学作品の使い方は，人文主義地理学と深く結びついた現在の文学地理学の水準からすれば陳腐なのかもしれないが，文学作品を利用することによって何かが明らかになるのであれば，それはそれなりに充分意味のあることだと評者は考える。

第二に，ある特定の地域・空間・場所に対する人間の認識・イメージを明らかにする資料として文学作品を使うものである。もちろん，ある文学作品から直接読み取れるのは，その作家の個人的な認識・イメージにすぎないが，複数の作家の文学作品や他の関連資料をあわせて検討することによって，社会的な認識・イメージをさぐり出すことが可能となる。本書にはこの例がないが，文学作品を使って軽井沢のイメージを明らかにした内田順文の研究[20]や，世間話

を史料に江戸の町人が感じた江戸の「不思議の場所」を記述した内田忠賢の研究[21]がそれに相当する。この方向性は，文学地理学としては最もとっつきやすく，大学の卒業論文としても取り組みやすいテーマなのだが，本書にその範たる論文がないのは残念である（したがって，本書は，文学に関心を持つ地理学の学生に恰好の入門書たりえていない)。この方向性の課題は，文学作品によって明らかになった認識なりイメージを，どう活用し，議論を展開させることができるかだろう。

第三に，一般的な空間認識や空間行動，場所の経験，環境観などをさぐる資料として文学作品を使うものである。本書中の例としては，阿部論文における「風景」論，内田忠賢論文における古代の空間認識論，福田論文のふるさと論，寺本・井藤論文における子どもの知覚・行動論が挙げられ[22]，本書所収論文の半数が，この方向性にあることになる。もっとも，阿部論文と内田忠賢論文には古代日本という限定があるから，そういう意味では第二の方向性に近いと言えるかもしれない。福田論文に対するコメントで上述したように，ある作家の文学作品のみから一般的な認識や行動を論じることには無理があり，この方向性では第二の方向性と同様，他の作家の作品や関連資料をあわせて総合的に検討する必要がある。ところで，第一の方向性では，文学作品が基本的にノンフィクションである必要があるのに対し，第二・第三の方向性ではその必要はなく，むしろフィクションであるがゆえに，人間の認識が明瞭に現れることもありうる。福田は，増田みず子の作品に地名がほとんど出てこないことで，逆に「「私」と場所についてより純粋な形で見ていくことができる」(233頁）と述べている。

第四に，文学作品の地理的側面（空間・場所など）を明らかにすることを目的として，文学作品を扱うものである。第一から第三の方向性では文学作品は研究の手段であったのに対し，第四の方向性では文学作品はそれ自体が研究対象であり，文学作品を論じることになる（作品論になる)。つまりこの場合，文学作品を扱うことが，最初から前提としてある。学問のカテゴリーにこだわれば，地理学よりも文学を志向することになるのかもしれない（これは，次の第五の方向性も同様である)。本書の内田順文論文における推理小説の場所論は，この方向性に位置づけられると評者は考える。寺本・井藤論文にある，作者の原風景が作品の架空空間に反映されているという指摘もそうである。また，杉浦論文・岩田論文・寺本・井藤論文などにおける地理学的注釈づけも，その成否はともあれ，この方向性に連なるだろう。もっとも，空間や風土といった地理学的視点を取り入れる文学研究者が存在することは周知の事実であり[23]，最近では「環境文学」というジャンルも注目され始めている[24]。地理学研究者が，彼らの研究成果といかにわたりあっていくかが大きな課題となろう。

第五は，第四の方向性が作品論だとするならば，作家論である。つまり，作家の地理的側面（空間認識・空間行動など）を明らかにすることを目的として，文学作品を扱うものである。これは，ある面において，文学研究者の作家研究に近づく一方，地理思想史研究の側面をも持ちあわせていると言える。また，上述の方向性との関連で言えば，第二・第三の方向性で特

定の作家の文学作品のみをとりあげることの限界を指摘したが，最初から特定作家の研究をすると割り切るならば，この方向性に位置づけられると考える。本書の山田・中村論文は，国木田独歩の場所をみる姿勢にこだわっている点において，この第五の方向性にある（山田・中村の議論を，一般的な人間の場所の見方にまで展開させるならば，第三の方向性へ行くことになる）。また，杉浦論文に見える長塚　節論もしかりである（ただし，自然観に言及する箇所以外はあまり地理的ではない）。評者の『山家集』論文も，西行の入峰ルートの推定で話が終わってしまえば，この方向性に属する。もっとも，作家論は作品論と分かちがたい面があり，第四の方向性に位置づけた内田順文の推理小説論は，同時に横溝正史論になっているとも言える。作品論同様，作家論には文学研究者の研究蓄積があるはずであり，それらに対して，いかに新しい知見を提示することができるかが課題となろう。

以上の五つの方向性がいずれも研究資料として文学作品を使うのに対し，第六の方向性として，杉浦の前著への拙評[25]でも触れたように，地理（学）教育の教材として文学作品を使うものが認められる。ニュージオグラフィーへの入門書をうたった杉浦の前著『文学のなかの地理空間』は，その成否はともかくとして，趣旨はこれに該当する。ただし，地理（学）教育と地理学研究は裏表の関係にあるから，教材としての文学作品の利用を，上述の五つの方向性それぞれに還元させて考えることも可能である。そうすると，ニュージオグラフィーの入門書『文学のなかの地理空間』は第三の方向性に，伝統的地誌教材としての文学作品の利用は第一の方向性に属することになる。なお，「文学地理学」を狭義の「研究」に限って，教材研究・教材作成的なものを除外すれば，この方向性は存在しない。

「文学地理学」という枠からさらにはずれ，研究・教育といったことを考えないのならば，人々に知識・教養を提供する，と割り切るのもひとつの方向ではある。実際，文学の分野では，作品の舞台となった場所や，作家にゆかりの地を紹介するガイド的な本は多い[26]（それだけ需要があるということでもある）。また，『名作文学に見る「家」』という建築家の本[27]では，建築家が文学作品中の家の間取りを図化しており，著者は，そこに文学的・建築学的意義を求めるよりも，「文学ファンのために新しい読み方，楽しみ方を提案した」（同書８頁）と述べている。これなど，『赤毛のアン』や『ムーミン』の架空空間を地図化する寺本・井藤の試みと通底するところがあるのではなかろうか。さらに，文学作品ではないが，近年，漫画「サザエさん」や「ウルトラマン」を分析した本[28]が江湖の評判をよんだ。両者ともマニア的な面はあるが，世の中に教養的娯楽を提供したという点では，それなりに意味のあることだろう。岩田が地形の解説をしたり，寺本・井藤が山の高さを推定したり（286頁）するところなどは，面白さは別として，この方向性に通じるものがあるように感じる。ただし，このような娯楽本を地理学的視点だけで，しかも面白く書くことは非常に難しい。『磯野家の謎』は読みやすい本ではあるが，「磯野家の住む家はどこにあるのか？」といった地理的なテーマは，全69項目中の１割程度にすぎず，続編『おかわり』では，その比率はもっと下がる。経営・法律・技術などの

研究者たちが集まって書いた『ウルトラマン研究序説』には地理的テーマはなく，しかも話がかなり専門的で，予備知識がないと，そう気軽に楽しく読める本ではない。はたして，地理学がこの種の娯楽本を書くことは可能であろうか。

なお杉浦は，「はしがき」で，文学（批評）理論への関心に触れ，その地理学への導入について示唆するが，本稿では文学作品を扱った地理学を「文学地理学」と考えたので，分析手法に関する杉浦のアイデアは，上記の分類に含めなかった。本稿で言う「文学地理学」と文学（批評）理論を使った地理学をあわせて，より包括的な「文学地理学」を構想するのか，また別の「文学批評地理学」とでも言うべきものを企図するのか，杉浦を含めた他の研究者の検討を待つことにしたい。

V．おわりに

以上本稿では，杉浦芳夫編『文学　人　地域―越境する地理学』をとりあげ，その内容を批判的に論じた後，本書からうかがえる我が国の文学地理学の動向について，評者の見解を述べた。すなわち，Ⅱ章では個々の論文について，Ⅲ章では本書全体について，なぜ面白くないかという問いかけをおりまぜながら，それらの問題点を指摘し，Ⅳ章では，文学地理学に文学作品の利用目的の点で五つないし六つの方向性があることを提起した。

最後に一点付け加えれば，本書の執筆者には，互いに活発に議論をしていただきたいものである。極論にすぎるかもしれないが，本書の執筆者は，他の執筆者の研究に無関心である。本書の八つの論文と「はしがき」のうち，自分以外の９人の執筆者による既往の研究を引用しているのは，寺本・井藤論文だけである。しかも，寺本・井藤論文も，杉浦の前著の内容を簡単に紹介しているにすぎない。そもそも文学地理学といっても，各人の関心の方向がかなり違い，引用するほど互いに近い関係にないと言ってしまえばそれまでだが，それにしても，もっと論文上で相互に議論をもち，共通の認識を得て，学問のレベルを高めてほしいと思うのは，別に無理な注文ではあるまい。実のところ，編者杉浦には，前著への拙評に対する何らかの答えを期待したのだが，拙評のキーワードだった「地誌」の語だけが転用されたような感じで（編者には「地誌（学）」という用語を使う別の考えがあるのだろうが），反応らしきものは読み取れなかった。文学地理学研究者が協力して本を出版することは，一見研究者間に対話があるように見えるが，内実は，各研究者がタコツボに入り込んで，他の研究者とは没交渉で研究を進めているような状況ではなかろうか。文学地理学の文献数が増えても，それではたして文学地理学の学問レベルは真に向上しているのだろうかと，評者は危惧する。本書の執筆者には，それぞれ別に，本書なり各論文の評文を書くことをお勧めしたいものである。そうすれば，阿部論文・内田忠賢論文・杉浦論文で三者三様に使われている「コスモロジー」という用語をどう考えるのかとか，柄谷行人の「風景の発見」論に対する阿部と山田・中村の評価はどう異なるの

かとか，あるいは杉浦が導入を考えている文学（批評）理論が，内田忠賢の揶揄する「他分野の理論らしきもの」(49頁）に相当するのか，などといった疑問もクリアになってくるだろう。

評者の常で，本稿もまた辛口の論考となった。評者の曲解している箇所も多かろうが，それらの指摘も含めて，本稿に対する反論なり意見を，論文上で開陳していただければ幸いである。

注

1）杉浦芳夫編『文学　人　地域―越境する地理学』，古今書院，1995，312頁。

2）杉浦芳夫『文学のなかの地理空間―東京とその近傍―』，古今書院，1992，308頁。

3）たとえば，①雑誌『人文地理』45巻3号の「学界展望（1992年1月～12月)」では，総論，学史・方法論，都市，民族・文化の4ヵ所で言及されている。評者も，この書に対する見解を，次の文献で述べた。②小田匡保「(書評）杉浦芳夫著『文学のなかの地理空間』」，歴史地理学166，1993，36～39頁。

4）「文学地理学」という言葉は，地理学ではまだ定着した用語ではない。最近刊行された英語圏の地理学辞典にも，それに該当する見出しは見あたらない。本稿では，文学作品を扱った地理学の研究を総称して「文学地理学」と呼ぶことにする。なお，国文学の分野では，久松が第2次世界大戦後まもなく「文学地理学」の構想を明らかにしている。彼は，日本文学研究のひとつの立場として形成論をあげ，その中で「文学を形成する地盤としての地理もしくは風土の研究」を「文学地理学」と考えている。「文学に現れた地理の研究」ではないとしている点に，注意を払うべきであろう。久松潜一『日本文学の風土と思想（久松潜一著作集2)』，至文堂，1968，16頁。1948年初出。

5）①潟山健一「(書評）杉浦芳夫編：文学　人　地域―越境する地理学」，地理科学51－2，1996，61～65頁。②竹内啓一「(書評・紹介）杉浦芳夫編：文学　人　地域―越境する地理学」，地理学評論69A―8，1996，710～711頁。

6）阿部は，視覚世界を環境・「見かた」・表現の三項からなる構造としてとらえ，表現からさまざまな「見かた」を推定することができるとする。阿部　一『日本空間の誕生―コスモロジー・風景・他界観』，せりか書房，1995，23～28頁。また彼は，日本文化の基層的な環境の「見かた」として，「風景」のほかに「宇宙観（コスモロジー)」と「他界観」があるとしている（同書199頁)。

7）前掲6）28頁。

8）東京都高等学校国語教育研究会編『東京文学散歩新装版』，教育出版センター，1992，58～59頁。

9）形式的な面だけをとりあげれば，注番号が86番まであり，他の執筆者と比べて格段に多い。

10）本章のタイトルになっている「シングル・セル」は，1986年の増田みず子の作品名で，「生命体として活動できる最小単位」との意味だという。

11）「ホーム」概念については，本書中229～230頁で，人文主義地理学の研究史を振り返るなかで論じられている。

12）『ムーミン』の地図化は，作品中の景観描写のみによるのではなく，むしろ作者が描いたというムーミン谷の地図がもとになっている（283頁)。

13）たとえば，ヘルシンキのあたりが温帯に属するという記述（270頁）や，プリンス・エドワード島の最高峰が海抜152mという記述（266頁）（手元の英米の地名辞典には142mとある)。著者は「実際の自然環境を調査した地理学の本」(310頁）を参照してはいるようだが，文献名を明記しないのは論文としてはマナー違反であるし，プリンス・エドワード島の概況叙述に，地理書や地名辞典でなく，文学書のみが引用されているのも（266～267頁)，「輸入超過」(3頁）のしすぎである。

14）同じことは，編者の前著に対する拙評でも，「地理学者が研究に文学作品を利用する以上，文学

作品でなければ分からない事柄の発見を期待する」と述べた。前掲３）②39頁。

15）小田匡保「「山家集」に見る山岳聖域大峰の構造」，史林70―3，1987，129～154頁。

16）たとえば，島津忠夫「西行の峰入の歌と『西行物語』」，武庫川国文47，1996，１～９頁。本論文では，拙論の図まで転載している。

17）たとえば，潟山は「全体的統一感の乏しさはやはり否めない」と述べている。前掲５）①64頁。

18）本稿は文学地理学の文献を網羅することは意図していないので，海外の文献はもちろんのこと，国内の文学地理学研究でも，評者が思いついたものしか挙げていない。

19）福田珠己「場所の経験：林芙美子『放浪記』を中心として」，人文地理43―3，1991，69～81頁は，文学作品に関する地理学的研究を，欧米の研究も含めて，次の三つに大別している。第一に，作品に描かれた地域・景観を対象としたもの，第二に，主体による場所の経験を論じたもの，第三に，社会というフィルターを通して文学にアプローチしたものである。第一の分類は，評者の第一・第二・第四の方向性と第五の方向性の一部に相当し，第二の分類は，評者の第三の方向性の一部に相当する。福田の第三の分類は，福田の説明だけでは内容がよく理解できないが（該当論文を評者が読んでいないことにもよる），本稿のいずれかの方向性に解消されるものと判断する。

20）内田順文「軽井沢における「高級避暑地・別荘地」のイメージの定着について」，地理学評論62A―7，1989，495～512頁の前半部分。彼はこの論文で，場所イメージを，作家の個人的な場所イメージと社会的な場所イメージに分けている。

21）内田忠賢「江戸人の不思議の場所―その人文主義地理学的考察―」，史林73―6，1990，115～142頁の前半部分。

22）近世の怪異小説を使って江戸人の「不思議の場所」をさぐった前掲21）の内田論文後半や，林芙美子の『放浪記』を使って人間と場所との関係を考察した前掲19）の福田論文も，この方向性に属する。

23）たとえば，前田　愛『都市空間のなかの文学』，筑摩書房，1982，506頁。日本文学風土学会編『風土と文学（風土文学選書１）』，教育出版センター，1984，200頁。

24）「環境文学研究」（エコクリティシズム）とは，文学作品の中で環境がどのように記述されているかを分析するという。野田研一「「環境文学」日米シンポの意義」，朝日新聞1996年10月１日付け（夕刊）。スコット・スロヴィック，野田研一編著『アメリカ文学の〈自然〉をよむ―ネイチャーライティングの世界へ―』，ミネルヴァ書房，1996，408＋36頁。

25）前掲３）②。

26）たとえば，前掲８）。

27）小幡陽次郎（文）・横島誠司（図）『名作文学に見る「家」』，朝日新聞社，1992，237頁。

28）東京サザエさん学会編『磯野家の謎』，飛鳥新社，1992，223頁。東京サザエさん学会編『磯野家の謎・おかわり』，飛鳥新社，1993，189頁。SUPER STRINGS サーフライダー21編著『ウルトラマン研究序説』，中経出版，1991，254頁。

〔追記〕

校正の段階で，アニメーション映画かつコミックである『風の谷のナウシカ』を分析した内田順文の次の論文が出た。内田順文「宮崎駿『風の谷のナウシカ』にみる「自然―人間」観と現代人の地球環境観について」，国士舘大学地理学報告５，1997，１～15頁。文学地理学の動向のとらえ方，映画・コミックの分析という点で，本稿に関連する内容を含んでいる。さらに，木村　礎「国生村―長塚節『土』の世界―」『村の世界　村の生活（木村礎著作集Ⅷ）』，名著出版，1966，201～260頁（初出は，同編著『村落生活の史的研究』，八木書店，1994）に気づいた。木村は村落史研究の立場から，『土』を題材に，明治末期の農村生活のようすを具体的に描き出しており，「歴史地誌」の呼称は木村論文にこそふさわしいのではないかと感じた。近代史における文学作品の史料としての利用という面からも興味深い論文である。

The Current Trends of Literary Geography in Japan

Masayasu ODA*

As the geography expands its scope and applies various methodology, some Japanese geographers have focused on literary works in recent years. Y. Sugiura, who had already in 1992 wrote a book on literary geography becoming the talk of the Japanese geographical circle, edited a new book in 1995 entitled *Literature, Man, and Region: Geography Crossing Disciplinary Frontiers*. Ten geographers including the editor contributed eight papers using literary works to this work in Japanese.

After giving critical comments on these papers and making clear why this book is not quite so interesting as expected to literary men as well as to geographers, this article discusses the current trends of literary geography in Japan. In terms of the purpose of using literary works, five or six directions mentioned as follows are observed in this book and some literature concerned.

1. To use literary works as a research material in order to clarify geographical phenomena in an individual region or space.

2. To use literary works as a research material in order to clarify the people's recognition or image of an individual region, space or place.

3. To use literary works as a research material in order to investigate the spatial recognition, spatial behavior, place experience, or view of environment in general.

4. To take up literary works in order to treat geographical aspects such as space and place observed in them. In this case, literary works are a research subject rather than a means of research.

5. To take up literary works in order to treat geographical aspects of the writer such as spatial recognition and spatial behavior.

6. To use literary works as a teaching material of geography. This can be reduced to five directions mentioned above, when we think that teaching and study are two sides of the same coin.

Lastly, this article points out that most of the authors of this book are indifferent to the study of other literary geographers, and encourages them to discuss with each other.

Komazawa Geography, No.33, pp.101–116, 1997

*Department of Geography, Komazawa University, Tokyo